

文芸OGネットワーク通信

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋 2-2-1 共立女子大学文芸メディア研究室内 文芸OGネットワーク
Tel & Fax 03-3237-2681 URL www.kyoritsu-wu.ac.jp/bungei
代表 高橋 京子 発行：2015.9.26

vol. 23

第12回 文芸サロン講座

— 文芸学部教授内田保廣先生による講演会を開催 —



「江戸の面影 ～浅草からの江戸の遊び場～」 を聴いて

諏訪部園子

平成 27 年度も、文芸 OG ネットワーク総会後に文芸サロン講座が開かれました。講師は、文芸学部教授の内田保廣先生で、演題は「江戸の面影～浅草からの江戸の遊び場～」でした。

しばし江戸時代へタイムスリップしたかのような 2 時間の講座でした。内田先生は、プロジェクターを駆使して、江戸時代の様々な興味深い事柄を終始軽妙な語り口で説明してくださいました。

まず、浅草寺の江戸時代の絵からスタートしました。江戸の始まりとしての浅草ということで、金龍山浅草寺を紹介してくださいました。私もお正月に初詣に行ってお参りするのにも物凄く並んだ、あの浅草の代名詞のような浅草寺が、今も活動しているもので最古のものだという事実を知り驚きました。浅草寺の起源は、寺伝によれば推古天皇 36 年 (628 年) だそうです。そんなに古い時代から存在していたお寺だとは露知らず、21 世紀の



現在も、常に人が集まり、海外からの観光客をも魅了する、東京観光には欠かせない有名な浅草寺を日本人として改めて誇りに思いました。浅草の三社祭には行ったことがあっても、三社権現のことは知りませんでした。宮戸川で漁をしていた 3 人の兄弟が聖観音像を拾って、それを祀った御堂が、後に浅草寺となったということですが、このような史実?には諸説あるのは世の常で、幕末以降信じられていない話もいくつかあるようでした。何年か前の初詣で、人生で初めて「凶」が出た、浅草寺で引いた記念すべきおみくじのことも懐かしく思い出しました。風の噂によると、浅草寺は割と「凶」が出やすいようです。あんなに初詣する人がいる浅草寺です。何百人に 1 人かは「凶」が出ても不思議ではないでしょう。「凶」を引いた本人は、心穏やかならず、驚愕して落ち込むことになりそうですが…。

さて、江戸時代のモードは遊女、芝居からということで、モードを生み出す場所としての役割も浅草にはあったようです。喜田川守貞の風俗考証書「守貞漫稿」は、江戸時代の風俗を分類・整理して挿絵を加えながら詳細に解説されているということで、是非読んでみたくなりました。江戸時代の婦人の髪のかき方の「勝山」も、吉原の遊女、勝山が最初に結い始めた髪型だということです。テレビやインターネットが無い時代、一般庶民にまで当時の文化や言い習わしを普及させることは決して容易ではなかったであろうことが簡単に想像できます。女店員の紅のついた唇のあとがある楊枝が売れる、男の客が多い楊枝店の話なんぞは、いつの時代も男という生き物は同じなのかと苦笑いしてしまいました。

歯を磨いて歯を白くする遊び人、道楽者にいたっては、歯のホワイトニングに必死になっている現代の遊び人と何ら変わりはないのではないかと思います。歯を黒く



する平安時代のお歯黒は知っていましたが、お歯黒ならぬお歯白？は初耳でした。「歯を磨く奴に限って食いつぶし」とも言われていたそうで、21世紀の現代にも通ずるような諺に、江戸時代の人々に親近感が湧いてきました。

今は何でもある便利な世の中になりましたが、「便利になるけど無くすものもある」という内田先生のお言葉が印象的でした。

今回お話を伺って、東京に住んでいながら、未だ行ったことのない浅草周辺の下町辺りと、何回も行ったことはありますが、あの有名な浅草寺に、もう一度行ってみたいくなりました。江戸時代に思いを馳せながら…。

(H元卒)

*本文中の画像は、講演中に撮影されたものです。(編集部)

OG ネット総会開催

BUNGEI OG NETWORK

平成27年度、文芸OGネットワーク総会が、6月6日(土)、本館103号室にて開催された。会員の参加者は、46名であった。

《定期総会》

高橋京子氏の代表挨拶の後、会は窪田智子氏の司会で進められた。

①会報、劇芸術関連の資料整理、共立祭、文芸サロン講座、在学生支援の各担当者から、平成26年度の活動報告と平成27年度の活動予定の報告があった。

②平成26年度の収支報告と監査報告があった。平成27年度の子算案が承認された。

総会后、昼食をはさんで、文芸サロン講座が開催された。

今年度は役員改選の年に当たり、新役員が選出された。

【代表】高橋京子

【副代表】下村陽子 川瀬治子

【総務】稲見和子 川邊恵 斎藤和子 窪田智子 土田富美子

【共立祭】加藤智美 萱沼あずさ

【会報】大友佳代子 小池恵己子 酒井康子 高橋京子(兼務)

【資料整理】多田久恵 川瀬治子(兼務)

【会計】恩田香子 村上智子 下村陽子(兼務)

【会計監査】沢野紀子 藤田喜久子

劇芸術資料室から

劇芸術資料整理室の演劇公演ポスター、チラシ、プログラム等の資料は、年代ごとに、公演団体名、公演会場別等に仕分けされ、整理作業が進んでいるが、併行して資料をパソコンに入力する作業が行われている。既に俳優座ポスター、宝塚公演プログラム、日本におけるハムレット公演ポスター等の入力終了しており、2015年7月現在、民芸の公演ポスターの入力が終わっている。



「アンネの日記」

1956年9月27日から11月14日まで俳優座劇場で公演された『アンネの日記』のポスターである。この時アンネ役を募集して三井美奈を選出、吉行和子とのダブルキャストでの公演であった。

パソコンへの入力は資料整理の一員である村上智子さんが中心になって行っているが、資料整理室の貴重な資料を皆さんに知っていただきたいと、整理した資料に説明文を加える作業も進めている。将来的には冊子にまとめたいと希望しているとのこと。その中から、今回、劇団民芸の公演ポスターの一部を紹介したい。



「夜明け前」

これは、1981年9月10日から20日まで国立劇場で再演された『夜明け前』第二部のもので、演出にかかわった滝沢修自身が描いた非常に珍しいポスターである。絵の中の姿からは、滝沢修の燃えるような情熱がふつふつと湧き上がるようである。

連載 私の学生時代 — 文芸学部で学んだ日々⑨ —

my school days

今回は、文芸学部で貴重な時間を過ごされたという10期生のお二人、日本文学専攻の多田野和江さんと英文学専攻の本多和子さんに書いていただきました。



共立の文芸学部で学んだ4年間私は私にとって贅沢な貴重な時間でした。日本文学を専攻し、本林勝夫先生の近代日本文学の講座を中心に、各講座を興味深くワクワクした思いで聴講いたしました。文学研究の裾野に触れて、学びの楽しさを知ったのはこの時代です。

また、幅広く文芸を学ぶという趣旨の「文芸学部」にも魅力を感じておりましたので、文学だけでなく芸術専攻の講座である北川桃雄先生の東洋美術史を受講したのは得がたい体験でした。とても素晴らしい授業で、自分なりの美術史ノート作りに夢中になったものです。その影響から私は奈良が大好きになり、後年まで何度も訪れることになりました。

子供の頃から本がとても好きだったので図書館学にも関心を持ち、卒

業後は結婚するまでの2年ほどを共立女子学園の図書館で過ごさせていただきました。本に囲まれた職場は心地良く、子育て後には私立学校の図書室に勤務しました。今は図書館で借りる立場ですが、本はいつも身近な存在です。学生時代は神保町の本巡りをよくいたしました。なにしろ通学路にありましたので、本好きの友人と古書店街の端の書店から順に書棚を眺めるのが嬉しく、最後は疲れ果てて、喫茶室でケーキと紅茶で一息ついたのも楽しい思い出です。

中年になり、展覧会で絵巻を見たのをきっかけに「源氏物語」の原文を、ラジオ講座の助けを借りながら時間をかけて全巻読み通しましたが、その世界は深く、もう一度学び直してみたい気がしました。実を言

えば学生時代は近代文学のほうにはばかり目が向いていたのですが、小野村洋子先生の中古文学の講義を必死にノートしたことがとても懐かしく、あの頃もっと古典に興味を持っていたらなどと、ふと思ったりしています。

振り返ってみますと、平凡な日々の歩みに文芸の彩りが潤いを添えて、私の人生を随分豊かにしてくれたように思います。こうした生き方の基盤を作ったのが、文芸学部で学んだ日々だったと感じております。

多田野和江 (旧姓：吉川) (S41卒)



私は、青森県弘前の女子高から共立女子大学文芸学部英文科に入学し、住まいとしては、西荻窪の寮「シオンの家」に入居しました。そこには、大学と短大のいろいろな学科と様々な地方出身の学生が集まっていて、多様な話を聞くことができ、見聞を広めることができました。

私は、地方出身で生真面目なほうだったので、外で遊ぶことがあまりなく、おとなしく暮らしていました。寮の学生の中には、パーティーや合コンに出かける人もいました。各地の名産品や珍しい物が集まってきましたが、特に印象深いのは、富山出身の方がもってこられた、「黒い」イカの塩辛」やそれまで食べたこと

のないような、「変わった」ラーメン」などでした。

部屋割りはたいてい二人部屋でした。私は福島県出身の田部 (旧姓馬場)さんと同室で、よく二人でおしゃべりをしたことは楽しい思い出です。ときには寮の食堂で大勢の人たちと話すこともあり、いろいろな話が出て、たいへん賑やかで楽しいものでした。

私は英文科なので、大学の授業は、主に英語や英文学やアメリカ文学などを、福原麟太郎先生をはじめ、富原芳彰先生、吉田正俊先生、朱牟田房子先生、外山弥生先生、岡本靖正先生など錚々たる方々から学びました。外山先生は、福原先生をたいへん尊敬されていて、まるでお父さま

に対するように接していらしたことを覚えています。

教科書は、覚えているかぎりではギヤスケルの『克蘭フォード (女だけの町)』、シェイクスピア、ヘミングウェイなどでした。私は、辞書を引くのに精一杯で、あまりたくさんは読みませんでした。若いころにもっと英語の勉強や読書をしておけばよかったと後悔しています。

本多和子 (旧姓：奈良岡) (S41卒)





目下、就活真っ最中の文芸学部4年生の平ひと美さんが、就職活動を通して感じた“あれこれ”を綴っていただきました。

就活あれこれ

その1 某IT企業のインターンシップで残ったギモン

とある就活サイト主催の「中小企業でインターンシップをしよう!」という企画に参加した時のこと。私は恋愛シミュレーションゲームを開発しているIT企業のインターンシップへ行った。作業内容は恋愛に関するブログ記事の作成。それだけだった。6日間通ったが、記事を書く以外の作業はナシ。社員さんとの交流もなかった。インターンシップ生にはいつもブログ記事を書かせているそうなのだが、これは仕事体験になるのだろうかという疑問が残った。

その2 某商社の説明会で配布された?な資料

その会社説明会では、たくさんの配布物ももらった。会社案内や説明会のレジュメ、企業が支援している企画の案内。そして社長の名言集。一瞬何とも言えない気持ちになった。どうやら社長はカリスマ性溢れる方ようで、人事の方々の社長リスペクト具合に驚いた。教師をしている母にそのことを話したら「まあ就職なんて一種の洗脳だから!」と言われた。教師の言葉は重い。

その3 某飲食業でのインターンシップで知った“働く”ことの奥深さ

1日限定のインターンシップにて「働くとはどういうことか」というテーマの講演があった。その時、講師をしている社員さんが「もし働かなくても月収30万円もらえらしたら貴方は働きますか」という質問を投げかけてきた。そりゃあもちろん働かないでしょうと思っていたが、他の参加者が「それでも働きます」と答えた。講師の方はうんうんと頷いていた。どうやら「それでも働く」ということが正解のようである。働くとは奥が深すぎて私には無理ではないかと思った瞬間である。

その4 某不動産業の闇

就活サイトに登録していると、スカウトという制度がある。自己PRなどを見て、「この学生に会ってみたい!」という企業が学生にラブレターのようなものを送るのだ。よくスカウトしてくるのは不動産業である(私の場合)。その中で、ラブレターの内容がほとんど同じだった2つの不動産業の説明会に行ってみた。

まず、説明会に来ている先輩社員がどちらも勤続年数が浅いということだ。実際、職場の雰囲気や仕事内容などを気軽に質問できるようにと、先輩社員が説明会に参加するケースはよくある。しかし、中途採用で3ヵ月目だとか6ヵ月目だとか、そんな「もっと他にいるでしょう」と言いたくなる先輩社員が参加していた。参加出来るのが勤続数カ月の人しかいないと考えると恐ろしい。

そして、面接での出来事。私は「不動産業に就職したい理由」を志望動機としていた。それを述べた後、面接官の人にそういう動機は求めていないようなことを言われてショックを受けた。どうやらその企業にとっては業種などどうでもよくて、金を稼ぐことが大好きでガンガン営業出来る人が欲しいのだとざっくり言われた。不動産業は恐ろしいという偏見を持った瞬間である。

就活であらためて知った“働く”というイミ

私はあまり真面目に就職活動している学生ではないが、不思議な企業を見ているのは楽しい。不合格の「お祈りメール*」が届くのは辛い、内定が出るまでは頑張りたい。働くというのはとても大変な事なのだと、働く前から思い知らされている。

*企業からの不合格通知に、「今後の活躍をお祈り致します」的な文章が入っていることから、不合格だったときに「祈られた」という表現を使います。私の周りだけの話かもしれませんが…。

広場 —「アントン・チャーホフの劇世界展」開催される—

平成27年3月5日から4月24日まで、本館ホールにて「アントン・チャーホフの劇世界展」が行われた。劇芸術研究室が所蔵し、OGネットがその整理をお手伝いしている演劇資料を本館ホールで公開するのは、「井上ひさし展」(平成24)「テネシー・ウィリアムズ展」(平成25)につづいて3回目となる。

チャーホフと言うと「櫻の園」、「櫻の園」と言うと東山千栄子、と連想するのは、戦後の新劇を見続けた人の反応であろう。チャーホフはシェイクスピアと並んで、日本では最も上演回数が多い劇作家の一人である。「櫻の園」は、敗戦後、焦土と化した東京で、初めて新劇合同公演として上演された(昭和20年12月)記念碑的作品でもある。東山千栄子は築地小劇場における公演の第2回目からラネーフスカヤ夫人を演じ続け、ラネーフスカヤ役女優として不動の地位を確立したことはまちがいないが、昭和40年代からは、数多くの女優がラネーフスカヤを演じている。例をあげれば、文野朋子、杉村春子、栗原小巻、佐久間良子、東恵美



劇芸術研究室所蔵の「櫻の園」のポスター

子、麻美れい、岸田今日子、奈良岡朋子、山田五十鈴、森光子、浅丘ルリ子、岩崎加根子などなど、日本の演劇界を代表する女優はすべてこの役を演じた、といっても過言ではない。ホールに展示されたポスター、プログラムは「櫻の園」「三人姉妹」「かもめ」などからチャーホフの出発点ともいえるヴォードビル劇まで網羅しており、チャーホフの劇世界を、具体的に示していたと思われる。

劇芸術研究室所蔵の演劇資料には、築地小劇場の検閲台本が含まれていることが有名である。「三人姉妹」(大正14年4月29日検閲)を例にあげれば「アンドレイがナターシャに接吻」とあるト書きの「接吻」に赤で線がひかれ、「所作削除」とある。この検閲制度に象徴される国家権力は、第二次世界大戦中にはますます過激となり、表現の自由にとどまらず、やがて俳優の生存権を奪うまでになっていったことを、我々は決して忘れてはなるまい。



「劇団東京」の「櫻の園」プログラム

多田久恵 (S45 院卒)

MEMBER'S ROOM 古代史に魅せられ…天橋立へ

今年度の総会の際、「天橋立に移住することを決断しました」という、佐藤和代さん(昭和41卒)の報告に、一瞬場内が沸きました。以前から興味を抱いていた伊勢神宮にまつわる歴史を探るため、移住を決められたとのことで、これはぜひお話を伺いたいと思い、その経緯を聞かせていただきました。

古代への扉は、大学卒業後に始めた短歌で開かれ、万葉集へ。さらに友人知人等から聞くご先祖の話にまつわる出来事を書物で調べると、古代につながっていることにトキメキ、好奇心が膨らんでいったそうです。

今回の移住は、元伊勢といわれる天橋立から、なぜ太平洋側に伊勢神宮を作ったのかを探るのが目的だとか。「書物に記されている史実と実際どうであったかの検証は、パズルをしているようで、なかなか結論に達することができないけれど、それがまた楽しいの(笑)。研究ではなく、あくまでも好奇心で謎に迫ります」と軽やかに話す佐藤さん。今後は、佐藤さんからの“天橋立便り”を楽しみにしたいと思います。

高橋京子 (H 元卒)

掲示版

INFORMATION

《2015 共立祭》

OGネットは、<日本のミュージカル ポスター・プログラム展>を行います。皆様のご来場をお待ちしています。毎年ご好評いただいているバザーも開催致します!

日時:10月17日(土)・18日(日) 10:00~16:00

場所:3号館・3階・303号室

詳細は、裏表紙をご覧ください。

編集後記

EDITOR'S NOTE

会員の皆様を繋ぐ「会報」。“内容の濃い、親しみやすい会報”を目指して、幅広く原稿依頼をしてきました。さらに、今回は紙面を増やすことでより多くの記事を載せることができました。

また、共立祭へたくさんの皆様にいらして欲しいとの思いから、大きく紹介をさせていただきました。「会報」を身近に感じていただけたら…。(O)

日本のミュージカル ポスター・プログラム展

宝塚・東宝・劇団四季、
さらには日本独自の「音楽劇」も視野に入れ、
これまで日本で上演されたミュージカルの歴史を
当時のプログラムやポスターとともに紹介！
(ポスター等は文芸学部劇芸術研究室所蔵)



大好評！バザーも開催！

10月17日(土)・18日(日)
10:00～16:00
3号館・3階・303号室

